

**2023 年度 一般選抜前期日程 小論文（長文理解）**  
**出題の意図と解答の傾向**

**【出題の意図】**

アンデシュ・ハンセン著・久山葉子訳『スマホ脳』（新潮社、2020年）から、私たちの生活において必需品となったスマートフォン（以下、スマホ）に対して批判的に再検討する部分や、テクノロジーが私たちに影響を与えていることに論述した部分を引用して、注意残余の存在と、その影響について受験生に問うた。

本書では、デジタル化していく社会において、便利な社会と思考との関係で語られている。今回出題した部分は、アップル社の創業者：スティーブ・ジョブズが自分の子どもにタブレット（iPad）を14歳になるまで使用させなかったというエピソードである。このことからスマホが人間の脳に与える影響について、スタンフォード大学の研究者らの研究結果から脳が持つ集中力の妨げになっていることを明らかにしている。

設問1は、テクノロジーが私たちにどんな影響を与えたのかについて、筆者の見解に関する問題文の記述を整理することを求めている。①スマホは、コミュニケーションツールとして発達してきた。②スマホを使用している人は、チャットの着信音が聞こえると、スマホを手に取りたい衝動に駆られる。③集中力の欠如につながる。という流れである。その各々について、筆者は事例を含めて簡潔に説明している。このような見解から、スマホが脳に与える影響が確実にあるものと考えられる。その点を過不足なくまとめることが求められている。

設問2は、テクノロジーが私たちに与えた影響について、設問1で整理した内容を基に「注意残余」の存在を示している。この存在は、誰もが経験したことのある事象である。そこで、自分自身が過去に経験したことから、なぜマルチタスクが難しいのかについて、問題文の趣旨を把握したうえで、自身の見解を述べることを求められている。

設問1と設問2ともに、受験生が日常生活で普通に経験していることについて問いかけている内容である。受験生には、今後も日常生活の中で当たり前に行っていることについて、疑問や問題意識を持ってもらいたい。

**【解答の傾向】**

**<設問1>**

設問1は、「影響」とは何かを聞いているのであって、その影響についての解答者の評価（意見）を尋ねているのではない。あくまで本文中で指摘されている「影響」について記述することを求めている。それにも関わらず、本文とは直接的には無関係なことを論じている解答もあった。また、解答者の意見、感想や決意表明などを求められないにも関わらず記述している解答が見受けられた。それゆえ当然、集中力を低下させるという点を指摘できていた答案は比較的多かったが、本文から離れ、テクノロジーないしスマートフォンの影響に関する一般論（フェイクニュースの危険性、SNS上の名誉毀損等）を指摘するものが散見された。聞かれていることに真正面から答えて欲しかった。

IoTの発達とスマートフォンの普及は、情報の取得と発信を容易にしている点で、情報の取得への言及は多かった。その一方で、情報の発信に直接的に言及しているケースが少な

った。そのためか、通知音への言及は多かったものの、「いいね」への執着により集中を削がれることに言及しているケースは多くなかった。また、「影響」と聞けば、悪いことばかりのように思う人が多い。そのためか、悪影響のみを指摘する答案が一定数見られた。しかし、「影響」には、良い影響もある。例えば、テクノロジーは、私たちの情報取得やコミュニケーションの在り方を変え日常生活を便利にするという影響もある。その視点からの解答が出てきてもよいと感じた。

設問1での印象的な記述として、「スマートフォンからの通知により脳がドーパミンを分泌し、それが現在の作業を中断させてしまう」というフレーズを引用して解答するケースが多くあった。このことは、本文の中心の一つであるために引きつけられることは理解できる。しかし、本文をそのまま引用してしまうことで文章全体が非常に冗長になってしまっている。マルチタスクに関する言及でも同様に本文中の文章をそのまま引用しているケースが見られ、字数を多く消費してしまうことで、他のことに言及できなくなっている解答が見受けられた。

## <設問2>

自らの「ながら勉強」の経験をもとにマルチタスクの難しさを説明する解答が多かった。そのためか全体的に設問へうまく対応できていた。その一方で、次のような解答も少なくなかった。

①設問に、「『注意残余』を踏まえて」とあるにも関わらず、注意残余に関する記述がなく、注意残余を踏まえているのか曖昧な解答。

②設問で求められている「自分自身の経験」についての記述がない解答。

③設問で求められている「あなたの考え」が示されず、問題文の主張を繰り返すことで終わっている解答など。

設問2では、「自分自身の経験に基づき」と書いていたが、自分自身の経験に基づかれていない解答が散見された。また、本文中で示されているネットサーフィンを自らの経験として説明している解答が一定数あった。この経験は、設問で問うている視点の経験と意味合いが異なる。

本文中に「複数のことを同時にしよう」とすることがマルチタスクと説明されているにもかかわらず、「多くのことをする」ことをマルチタスクと勘違いしている解答が散見された（仕事は多くても、多くの時間をかければマルチタスクは発生しない可能性がある）。また、怠惰とマルチタスクの弊害を混同している解答が一定数あった（怠惰でなくてもマルチタスクの問題は発生する）。

## 【その他 気づいた点】

- ・「脳がスマホを取りたい衝動に駆られる」のような、主語と述語の対応がおかしいもの。
- ・「最中」を「際中」とするなどの誤字や脱字。
- ・文字数以内ではあるが、文言を挿入するなどの修正。
- ・「こと。」など不自然な体言止めを使用するもの。
- ・同じ意味の文章が繰り返し書かれているもの。

・話し言葉で書かれているもの。

×「スマホをいじる」→○「スマホを触る」

×「・・・じゃない」→○「・・・ではない」

×「触んない」→○「触らない」